

# リサーチクエスションの評価を構成する諸要素について

## The Elements That Make Up the Evaluation of Research Questions

時 岡 新 岩 崎 公弥子 内 山 潤

Arata TOKIOKA

Kumiko IWAZAKI

Jun UCHIYAMA

柳 瀬 公 代 福 田 順

Kimiyo YANASE

Jun FUKUDA

### はじめに

本稿は内山・他（2019）「高校生のリサーチクエスションに関する評価基準」の姉妹編である。したがって研究の背景、目的などは同一、連続しているのだが、論考としては独立しているもので、重複をいわず最小限に述べる。詳細は前稿にあたられたい。

筆者らは金城学院中学校、高等学校で2004年度より実施されてきた旧・総合的な学習の時間、現・総合的な探究の時間であるDignityの授業にさまざまにかかわってきた。なかでも高等学校2年次のグループ研究についてはそのテーマ、リサーチクエスションの設定過程をめぐる調査を継続しており、前稿では2017年度実施の調査データを、本稿では2018年度実施の調査データを用いて議論を進める。

前稿では先行研究によりながら、生徒たちがリサーチクエスションを設定するための能力を授業のなかでどのくらい修得しえたのか、同一の質問紙調査を学年の始めと終わりに実施するやり方で測定した。すなわち後藤・伊藤・登本（2014）の言う不適切な「問い」を

列挙し、1点から5点までのスケールで評価させ、四月と二月の時点間でその変化を追った。評価の軸はリサーチクエスションの全体的・総合的なよしあし、実現可能性、その問いにたいする興味・関心である。

学年の始めにはリサーチクエスションの問題点に気づき、低い評価を与える傾向は弱く、学年の終わりには全体的に厳しい評価を示す割合が増えた。それらを学修の成果と見てDignityの授業全体のあり方を肯定的にとらえることに無理はない。しかし、「問い」の内容によっては実現可能性について学年の始めから低い評価を与える傾向が確認されたり、それとは逆に本来ならば学年の終わりには評価を下降させるべき項目でありながらそのようになっていない傾向も散見された。分析の結果、生徒たちがリサーチクエスションの評価を「一般的な判断」としてくだし、自分たちが実際に取り組むものとしてとらえる姿勢の不足が指摘された。Dignityの教育効果について考えるさいには、ごく一般的な評価の基準を獲得することにくわえ、みずからが調査、研究を遂行するための評価、判断基準を

どのくらい身につけたかにも照準しなければならぬ。例示されたリサーチクエスチョンを外在的に評価することにとどまらず、みずから問いを立てる、すなわちリサーチクエスチョンを構築するちからをこそ修得させたいからである。

以上のような研究実績と課題をふまえ、本稿では、リサーチクエスチョンにたいする評価という調査、分析方法については継続しながら、そこで挙げるリサーチクエスチョンを生徒たちが作成したものに換えた。これにより、一方で生徒たちがどのような姿勢、好みでそれらを考え出しているかを確認しつつ、学修の積み重ねをもって彼女たちがどのように変化するか、あるいはしないのかを把握しうる。ゆえに考察にあたってはつねに（厳密には前年度の生徒、ではあるが）生徒たち自身がそのリサーチクエスチョンを設定した理由をふまえて、それに照らして、それらにたいする評価の変化を見ていくことになる。

また、同じく考察にあたっては、前稿に引き続き『平成29・30年改訂 学習指導要領』が「総合的な探求の時間」の目的として挙げた次の諸点にも依拠する。

第1目標 探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

さらに念のために付言するが、Dignityの授業の内容は『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』に沿っており、その点にも留意しなければならない。これも前稿の通りである。

探究的な学習とは、図（筆者注：本稿では略）のような問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動である。こうした探究の過程は、およその流れのイメージであり、いつも順序よく繰り返されるわけではなく、学習活動のねらいや特性などにより順序が前後する場合がある。

- ①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②【情報の収集】必要な情報を取り出したたり収集したりする
- ③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

以上のような制度的背景をもふまえ、今回の調査、分析は実施された。

## 1 調査項目と回答の構成

今回調査では、2017年度に当時の高等学校2年次生たちが作成したりサーチクエスチョンを用いた。それらはたとえば「本当に長時間労働をなくせるのか」「アンパンマンの登場人物はなぜ子供たちに人気なのか」「日本人はなぜ行列に並んでしまうのか」「昔のCMと現代のCMのちがひ」といったようなも

例示したリサーチクエスション

①	どのペットが一番癒されるのか
②	SNSは私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか
③	なぜウエディングドレスは白いのか
④	広告の効果は絵と文字のバランスで変わるのか
⑤	好印象を与える人と与えない人の違いは何か
⑥	なぜ日本は整形に否定的なのか
⑦	北海道と沖縄の和食の違いがなぜ生まれるのか
⑧	きょうだいがいる子といない子の性格の違い
⑨	授業のやり方と学力の変化は関係があるのか
⑩	ジブリ映画が人に与えるものは
⑪	女性を重役に起用している国ほど栄えているのか
⑫	国によって“美しい人”の観点は違うのか
⑬	ウォータープルーフのマスカラは水の温度に左右されるか、また水以外の液体だとどのようなになるのか
⑭	エアリズムとヒートテックは実際にはどのような特徴があるのか
⑮	日本人は本当にコミュニケーション能力が低いのか

のであったが、調査にあたって類似のものをのぞき、典型的と判断される15の問いに絞った。それらを一覧表で示す。

また、これらのリサーチクエスションにたいし、次のように問うた。

「問いの明確さ」→このリサーチクエスションが分かりやすいかどうかを評価してください。評価できない場合には「0. わからない」に○をつけてください。

選択肢：0. わからない 1. まったく不明確 2. やや不明確 3. おおむね明確 4. とても明確

「調査・研究の実現可能性」→このリサーチクエスションは実際に調査・研究ができるでしょうか。評価できない場合には「0. わからない」に○をつけてください。

選択肢：0. わからない 1. 実現可能性がない 2. 実現可能性が低い 3. おおむね実現可能 4. 実現可能

「自分の興味・関心」→このリサーチクエスションの調査・研究を自分でやってみたいか

どうか評価してください。評価できない場合には「0. わからない」に○をつけてください。

選択肢：0. わからない 1. まったくない 2. あまりない 3. 少しある 4. とてもある

以上のようなリサーチクエスションと回答選択肢を掲げ、2018年度の2年次生全員を対象とした質問紙調査を実施した。調査の時期は前回と同じく四月（以下「調査1」と表記）と二月（以下「調査2」と表記）であり、欠席者等を除き両調査ともに回答した286名を今回の分析対象とする。

じっさいの回答はどのようなであったか。リサーチクエスション⑫を例にとって詳細を示す。（以下、リサーチクエスションを適宜「RQ」と略記する）。

「⑫ 国によって“美しい人”の観点は違うのか」というRQにたいする「問いの明確さ」の評価は、調査1の時点では「4. とても明確」31.8%、「3. おおむね明確」44.1%、「2. やや不明確」16.4%、「1. まったく不明確」3.1%、「0. わからない」と無回答を足し合

わせたDKNA 4.5%。これらにたいし調査2の時点ではそれぞれ19.6%, 52.1%, 25.2%, 2.1%, 1.0%である。調査1と調査2の時点で「4. とても明確」と回答する割合は12.2ポイント減少し、「2. やや不明確」は8.8ポイント増加している。同じRQにたいする「調査・研究の実現可能性」の評価は、調査1の時点では「4. 実現可能」21.3%、「3. おおむね実現可能」36.7%、「2. 実現可能性が低い」33.2%、「1. 実現可能性がない」4.5%。調査2の時点ではそれぞれ12.6%, 43.7%, 35.3%, 5.2%, 3.1%。「4. 実現可能」と回答する割合が調査1と調査2のあいだで8.7ポイント減少したのにたいし、「3. おおむね実現可能」の割合は7ポイント増加した。「自分の興味・関心」の評価は、調査1の時点で「4. とてもある」30.4%、「3. 少しある」39.2%、「2. あまりない」22.7%、「1. まったくない」4.9%。調査2の時点では18.9%, 45.1%, 25.2%, 9.1%。興味が「4. とてもある」と回答する割合は、調査1の時点で30.4%であったものが調査2の時点では11.5ポイント減じている。

今回調査では「0. わからない」という回答または無回答(DKNA)の割合がいずれのRQでもごく小さなものであった。そこで本稿ではDKNAを平均値の算出には用いるが、紙幅の制約から表を小さくするためにそれらを略す場合がある。また数値の表示は小数点以下一桁あるいは二桁までとするが、四捨五入によってそれが精確な値でない箇所も

表1

	明確さ		実現可能性		興味・関心	
	調査1	調査2	調査1	調査2	調査1	調査2
4	31.8	19.6	21.3	12.6	30.4	18.9
3	44.1	52.1	36.7	43.7	39.2	45.1
2	16.4	25.2	33.2	35.3	22.7	25.2
1	3.1	2.1	4.5	5.2	4.9	9.1
0	4.5	1.0	4.2	3.1	2.8	1.7

ある(0.003が0.00と表示されるなど)。

## 2 調査結果の概要

### (1) 問いの明確さ

リサーチクエストごとに各項目の回答傾向を平均値と標準偏差(SD)で示し、全体的な傾向について述べる。まず「問いの明確さ」の評価(表2-1)については、調査1では「③なぜウェディングドレスは白いのか」の3.29がもっとも高く、「⑩ジブリ映画が人に与えるものは」の2.51がもっとも低い。調査2では「③ウェディングドレス」3.28がもっとも高く、「①どのペットが一番癒やされるのか」2.42、「⑩ジブリ映画」2.43などが低い。調査1と調査2で平均値の変化がもっとも大きいのは「①ペット」で0.21ポイントの減少、変化が小さいのは「⑬ウォータープルーフの Mascara は水の温度に左右されるか、また水以外の液体だとどのようになるのか」で平均値は調査1、調査2ともに3.06である。調査1、調査2ともに評価が高かった「③ウェディングドレス」だが、SDは調査1の1.017から調査2の0.838に変化している。

平均値がとくに大きい、および小さいRQについて簡単に確認しておく。先に見た『学習指導要領』の文言を用いて言うならば、そこに示された「課題に関わる概念」がじゅうぶんに理解され、あるいはその問いの「意義や価値」を認めるていどの強弱に由来して、生徒たちにとってのリサーチクエストの「分かりやすさ」が構成されると考えられる。それをふまえて「③なぜウェディングドレスは白いのか」や「②SNSは私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか」の回答傾向に注目したい。調査1の時点でRQが「とても明確」だと回答した割合がもっとも高かった「③ウェディングドレス」53.8%は調査2の時点でも同じくもっとも高く47.2%である。

「とても明確」「おおむね明確」を足し合わせると、調査1では86.0%、調査2では85.7%となっている。「② SNS」も似かよった回答傾向を示しており、「とても明確」「おおむね明確」を足し合わせると調査1では89.8%、調査2では84.3%である。高校2年生の彼女たちにとって「ウェディングドレス」はよく知った衣装であり（かりに「打掛」について問うていたら回答傾向は大きく違ったであろう）、彼女たちが生きてきた近年ではその多くが「白い」ことも承知している。すなわち「課題に関わる概念」の理解はできている。その上で、それがなぜ白いのかを探求することに「意義や価値」があると判断した。同様に自分は「SNS」とは何かを知っていると思ひ、またそれが自分たちの生活に影響を及ぼすものであるとも認識した上で、RQとしての評価を下している。

これらとは対照的に「まったく不明確」「やや不明確」だと回答した割合が高い（すなわち平均値が低い）のは、調査1では「⑩ ジブ

リ映画が人に与えるものは」46.8%、「① どのペットが一番癒やされるのか」39.8%などである。これらの傾向は調査2でも同様に見られ、それぞれ「⑩」54.9%、「①」51.1%であった。前段にならって言えば、回答した生徒たちは「ジブリ映画」とか「人に与えるもの」の内実、含意があいまいであると判断したようである。映画とはどの作品なのかがはっきりしないのと同じく、ペットとはどの動物を指すのか、癒やされるとは何かなどについても「不明確」との判断を下した。

しかし、疑問も残る。生徒たちは何をもって「SNS」は明確であり「ジブリ映画」は明確でないと判断しているのか。言い換えれば彼女たちはなにゆえ「SNS」について自分は（何かしら）知っていると考え、「ジブリ映画」はそうでないのか。むろん後者のばあいには「人に与えるもの」の不明瞭さが含まれる。けれど前者にも「私たちの生活に及ぼす影響」という広範囲にまたがる課題が明記されている。これらについては後節で検討

表2-1 明確さ

	平均値		標準偏差 (SD)		平均値 調査1と2の差
	調査1	調査2	調査1	調査2	
ペット ①	2.63	2.42	.900	.905	0.21
SNS ②	3.27	3.15	.688	.802	0.12
ウェディングドレス ③	3.29	3.28	1.017	.838	0.00
広告の効果 ④	3.06	3.24	.964	.779	-0.19
好印象 ⑤	2.86	2.85	.932	.811	0.02
整形 ⑥	2.85	2.83	.994	.870	0.02
和食の違い ⑦	2.99	3.00	.980	.927	0.00
きょうだい ⑧	2.95	2.78	.970	.855	0.16
授業と学力 ⑨	3.00	2.95	.902	.786	0.05
ジブリ映画 ⑩	2.51	2.43	.965	.879	0.08
女性重役 ⑪	2.65	2.76	1.031	.930	-0.10
美しい人 ⑫	2.95	2.87	1.009	.782	0.08
マスカラ ⑬	3.06	3.06	1.168	1.099	0.00
エアリズム ⑭	2.73	2.81	1.202	1.021	-0.08
コミュニケーション ⑮	2.72	2.62	.980	.909	0.10

を深めたい。

## (2) 調査・研究の実現可能性

次に「調査・研究の実現可能性」の評価(表2-2)を見ると、調査1では「⑬ ウォータープルーフのマスカラは水の温度に左右されるか、また水以外の液体だとどのようになるのか」の3.19がもっとも高く、「⑩ ジブリ映画が人に与えるものは」の2.51がもっとも低い。調査2では「④ 広告の効果は絵と文字のバランスで変わるのか」がもっとも高く3.25だが、「⑬ マスカラ」3.11もそれに次ぎ、「① ペット」2.22がもっとも低いが、「⑩ ジブリ映画」2.38も相対的に低い。調査1と調査2で平均値の変化がもっとも大きいのは「④ 広告の効果は絵と文字のバランスで変わるのか」の-0.22ポイントで調査1の平均値よりも調査2の平均値の方が高くなっており、SDの変化も相対的に大きい。対照的に「⑬ マスカラ」「⑩ ジブリ映画」のSDの変化は相対的に小さい。

平均値がとくに大きい、および小さいRQについて簡単に確認する。先に見た『学習指導要領』の文言を用いれば、その問いについて「情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現できる」かどうかという見通しの強弱に由来して、生徒たちにとってのリサーチクエストの「実現可能性」の評価が構成されると考えられる。それをふまえて「⑬ ウォータープルーフのマスカラは水の温度に左右されるか、また水以外の液体だとどのようになるのか」「② SNSは私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか」の回答傾向に注目しよう。調査1の時点でRQが「実現可能」だと回答した割合がもっとも高かった「⑬ マスカラ」51.4%は調査2の時点でも45.1%と最も高い。「実現可能」「おおむね実現可能」を足し合わせると調査1では85.3%、調査2では82.2%である。「② SNS」についても調査1では89.8%、調査2では84.3%であった。実現可能性を構成する「情報の収集、整理・分析、まとめと表現」に当てはめると、

表2-2 実現可能性

	平均値		標準偏差 (SD)		平均値
	調査1	調査2	調査1	調査2	調査1と2の差
ペット ①	2.41	2.22	.904	.870	0.18
SNS ②	3.11	3.05	.729	.771	0.06
ウエディングドレス ③	3.05	3.06	1.023	1.010	-0.02
広告の効果 ④	3.03	3.25	.962	.815	-0.22
好印象 ⑤	2.54	2.58	.935	.854	-0.04
整形 ⑥	2.58	2.57	.925	.842	0.01
和食の違い ⑦	2.98	3.01	1.021	.904	-0.03
きょうだい ⑧	2.64	2.50	.966	.890	0.14
授業と学力 ⑨	2.72	2.67	.980	.815	0.05
ジブリ映画 ⑩	2.51	2.38	.901	.833	0.13
女性重役 ⑪	2.53	2.55	1.014	.892	-0.01
美しい人 ⑫	2.66	2.57	.998	.890	0.09
マスカラ ⑬	3.19	3.11	1.143	1.123	0.08
エアリズム ⑭	2.91	2.90	1.174	1.070	0.01
コミュニケーション ⑮	2.43	2.32	.883	.804	0.12

生徒たちは「マスカラ」「SNS」をともに日常的に身近な道具や手段として認識し（ゆえに「情報」の収集は可能であると考え）、それらについてのよしあし、すききらい等々の判断を下し（ゆえに「分析」もできると考える）、たとえば友人どうしでそれらについて話す機会を持っている（ゆえに「表現」できると考える）。さらに『学習指導要領』から引けば「実生活と自己との関わり」から見いだしうる「問い」（マスカラの使い勝手、SNSの影響）としてそれらのRQを捉え、評価していると見ることもできる。

対照的に「実現可能性がない」「実現可能性が低い」と回答した割合が高かったのは、調査1では「⑮日本人は本当にコミュニケーション能力が低いのか」48.2%、「⑩ジブリ映画が人に与えるものは」47.5%などである。調査2では「①どのペットが一番癒やされるのか」61.2%、「⑮日本人」56.6%などの割合が高い。情報の収集という点から見れば「コミュニケーション能力」や「人に与えるもの」などは何をどのようにすれば把握しうるのか、あいまいである。あるいは「ジブリ映画」や「ペット」についても、どこまでを調査や研究の対象に含めばよいか、何を調べればよいか判然としない。生徒たちの判断はそのかぎりで一定の妥当性を持っている。

しかしまた、映画が「人に与えるもの」を調査、研究することが難しいのであれば、SNSがどのように「生活に影響する」かを把握することも容易ではない。かりに質問紙調査を行うとしても、たとえば「影響」について実査に耐えうる操作的定義をするのは職能研究者でも十全ではないはずである。生徒たちは、それらについてはほとんど思いを致さず、たんに身近であることのみをもって調査、研究の実現可能性を推し量っているのであろう。『学習指導要領』の「実生活と自己との

関わり」はその点をどのように考慮に入れているのか。

### (3) 自分の興味・関心

回答者自身の「興味・関心」（表2-3）については、調査1では「③ウェディングドレスはなぜ白いのか」2.90、「⑫国によって“美しい人”の観点は違うのか」2.90がもっとも高く、「⑭エアリズムとヒートテックは実際にはどのような特徴があるのか」2.14がもっとも低い。調査2では「⑤好印象を与える人と与えない人の違いは何か」2.84がもっとも高く、「⑨授業のやり方と学力の変化は関係があるのか」2.83がそれに続き、「⑭エアリズムとヒートテック」2.20がもっとも低い。調査1と調査2で変化がもっとも大きいのは「④広告の効果は絵と文字のバランスで変わるのか」で0.30ポイントの増加、もっとも小さいのは「⑥なぜ日本は整形に否定的なのか」の0.00である。SDについて大きな変化が認められるRQはない。

平均値がとくに大きい、および小さいRQについて確認する。『学習指導要領』の文言を用いれば、その問いについて「探求の意義や価値の理解」「自己との関わり」「主体（性）」の多寡や強弱に由来して生徒たちにとってのリサーチクエスチョンにたいする「興味・関心」の度合いが左右されると考えられる。調査1で興味・関心が「とてもある」と回答した割合が高かったのは「③なぜウェディングドレスは白いのか」30.8%、「⑫国によって“美しい人”の観点は違うのか」30.4%、「⑤好印象を与える人と与えない人の違いは何か」29.7%、「⑧きょうだいがいる子といない子の性格の違い」28.3%、など。「とてもある」「少しある」を足し合わせると「③ウェディングドレス」71.4%、「⑫“美しい人”」69.6%、「⑤好印象」68.5%、「⑧きょうだい」

66.4%であった。調査2で「とてもある」と回答した割合が高かったのは「⑤ 好印象」「⑨ 授業のやり方と学力の変化は関係があるのか」の26.6%であり、「とてもある」「少しある」を足し合わせると「⑨ 授業と学力」69.6%、「② SNSは私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか」64.7%、「⑫ “美しい人”」64.0%などである。これらのことがらについて生徒たちはあるていどの関心を持ち、自己との関わりを感じて探求の意義や価値をみとめていることになる。

他方、興味・関心が「まったくない」「あまりない」を足し合わせた割合は、調査1では「⑭ エアリズムとヒートテックは実際にはどのような特徴があるのか」54.6%、「⑪ 女性を重役に起用している国ほど栄えているのか」51.7%などが高く、調査2でも「⑭ エアリズム」55.6%、「⑪ 女性重役」46.9%などが高い。

やはり『学習指導要領』の文言に沿って言うならば、回答した彼女たちにとってウェディ

ングドレス、人に与える印象、きょうだいなどと「自己との関わり」はつよく、機能性下着や女性の官僚、閣僚との関わりはよわい。あるいはウェディングドレスやきょうだい、授業と学力について探求することの「意義や価値」はみとめるが、衣類や国政についてはそうではない、などとなるのか。

### 3 リサーチクエストの比較と考察

ここからは個別のリサーチクエスト(RQ)を比較することで、生徒たちのおおよその傾向をさぐっていきたい。なお以下、紙幅の制約から各集計表をできるだけ小さくするためにすべてのDKNAを略す。

#### (1) 積極的な評価の割合が高いRQ

はじめに「② SNSは私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか」と「③ なぜウェディングドレスは白いのか」とを比較してみる(表3-1)。微細に見れば、たとえば調査1「② SNS」の「明確さ」では「おおむね

表2-3 興味・関心

	平均値		標準偏差 (SD)		平均値
	調査1	調査2	調査1	調査2	調査1と2の差
ペット ①	2.55	2.56	.927	.930	-0.01
SNS ②	2.83	2.76	.842	.874	0.07
ウェディングドレス ③	2.90	2.70	.998	.987	0.20
広告の効果 ④	2.38	2.68	.962	.970	-0.30
好印象 ⑤	2.86	2.84	1.007	.935	0.02
整形 ⑥	2.56	2.56	1.027	1.006	0.00
和食の違い ⑦	2.23	2.24	.997	.956	-0.01
きょうだい ⑧	2.83	2.75	.988	1.021	0.08
授業と学力 ⑨	2.74	2.83	1.027	1.003	-0.09
ジブリ映画 ⑩	2.65	2.55	.979	.992	0.09
女性重役 ⑪	2.33	2.43	.982	.974	-0.10
美しい人 ⑫	2.90	2.70	.986	.936	0.19
マスカラ ⑬	2.56	2.47	1.131	1.129	0.09
エアリズム ⑭	2.14	2.20	1.050	1.008	-0.06
コミュニケーション ⑮	2.52	2.48	.954	.979	0.05

明確」51.0%、「とても明確」38.3%であるのにたいし、調査1「③ ウェディングドレス」の「明確さ」は「おおむね明確」32.2%、「とても明確」53.8%となっており、「② SNS」にくらべて「③ ウェディングドレス」の評価が高い。平均値も調査1の「② SNS」3.27よりも「③ ウェディングドレス」3.29の方がわずかながら高い。しかしながら「おおむね明確」と「とても明確」を足し合わせると調査1「② SNS」89.8%、調査1「③ ウェディングドレス」86.0%と差異は小さい。そこで以下「おおむね明確」と「とても明確」を足し合わせて「明確」、「おおむね実現可能」と「実現可能」を足し合わせて「可能」、興味・関心が「とてもある」と「少しある」を足し合わせて「ある」として分析を進めたい。再掲すれば、RQとしての分かりやすさの評価では「② SNS」を「明確」と回答した割合は調査1で89.8%、調査2で84.3%、「③ ウェディングドレス」は調査1で86.0%、調査2で85.7%とおおむね類似している。同様

に実現可能性の評価では、「② SNS」を「可能」とした割合はそれぞれ83.9%、81.8%、「③ ウェディングドレス」は78.7%、79.4%。興味・関心が「ある」とした割合は「② SNS」で68.9%、64.7%、「③ ウェディングドレス」で71.4%、61.5%である。

これらの2つのRQは、回答傾向の類似とは相反して、内容には大きな異同がある。すでに何度か指摘しておいたが、SNSとウェディングドレスとは概念の幅がまったく違う。SNS、ソーシャルネットワークサービスとはインターネット上でのネットワーク構築にかかわるしくみの総称であり、含意は多岐にわたる。具体的なウェブサイト限定しても複数あり、各機能にまで分け入って考えるならばその研究は初学者の手に余る。たいしてウェディングドレスは、むろん無数のデザインや色、素材等はあるものの、婚礼の際の着衣という意味では限定的である。さらに「生活に及ぼす影響」を調査、研究することの困難に比して「白い」ドレスの由来や意

表3-1 ②SNS／③ウェディングドレスの比較

② 調査1	まったく不明確	0	可能性がない	1.0	まったくない	5.2
	やや不明確	9.4	可能性が低い	14.3	あまりない	25.2
	おおむね明確	51.0	おおむね可能	54.5	少しある	47.9
	とても明確	38.8	実現可能	29.4	とてもある	21.0
② 調査2	まったく不明確	1.4	可能性がない	2.8	まったくない	5.2
	やや不明確	12.9	可能性が低い	14.7	あまりない	28.7
	おおむね明確	49.0	おおむね可能	54.5	少しある	45.1
	とても明確	35.3	実現可能	27.3	とてもある	19.6
③ 調査1	まったく不明確	1.4	可能性がない	2.1	まったくない	8.0
	やや不明確	7.7	可能性が低い	14.3	あまりない	18.5
	おおむね明確	32.2	おおむね可能	40.9	少しある	40.6
	とても明確	53.8	実現可能	37.8	とてもある	30.8
③ 調査2	まったく不明確	1.7	可能性がない	3.1	まったくない	7.7
	やや不明確	11.2	可能性が低い	13.3	あまりない	28.0
	おおむね明確	38.5	おおむね可能	40.9	少しある	39.5
	とても明確	47.2	実現可能	38.5	とてもある	22.0

味を探索してくるものの容易さは明らかであろう（当然ながら、ほんとうにその「白さ」の根源にたどり着くか否か、という意味ではない）。これらの異同をまったく考慮に入れず、生徒たちはいずれのRQも「分かりやすく」、「実現可能性があり」、「ある程度の興味、関心がある」と見るのである。

その判断には、ごく自然なことに、彼女たちの「実生活」（『学習指導要領』や「体験活動」（『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』）がつよくふかく関わっている。SNSは（その概念の複雑さとは裏腹に）日ごろの生活に分かちがたく存在し、それなしでは友人関係さえ維持できない。その経験に取材すれば調査・研究など難なくできると考えてもやむを得ないだろう。もっとも、何か一つでも踏み込んだ質問を投げかければたちまち答えに窮して、甚だしくは不快にさえ思うかもしれない（そのように反応する大学生はいくらもいる）。

SNSについては生徒たちの思う“身近さ”が適切な判断、評価を左右し、消極的な影響を与えるおそれを注視したい。たいしてウェディングドレスについては、調査・研究の容易さの予期が「探求の意義や価値」にすり替えられていくおそれを挙げたい。どのようなRQが適切であるかを考えて遂行可能性にばかり気を取られては、重大、切実ではあるけれど到達困難な課題にむきあうことをあらかじめ回避する傾向も生じてしまう。SNSについては“分かったつもり”でいる、そうなることが危惧され、ウェディングドレスでは“一通りやりきることができそう”と感じて易きに流れるありさまが悩ましい。

## (2) 積極的な評価が与えられないRQ

回答傾向を全体的にみて、積極的な評価の少ないRQの一つが「⑩ ジブリ映画が人に

与えるものは」である。ここでは「⑫ 国によって“美しい人”の観点は違うのか」と対比させながら検討していきたい（表3-2）。

「⑩ ジブリ映画」を「まったく不明確」または「やや不明確」とした割合（以下「不明確」）は調査1では46.8%、調査2では54.9%。「実現可能性がない」または「実現可能性が低い」（以下「不可能」）は調査1で47.5%、調査2で53.5%。興味・関心が「まったくない」「あまりない」（以下「ない」）のは調査1で43.0%、調査2で45.1%である。これらにたいし「⑫ “美しい人”」は、調査1、調査2でそれぞれ「不明確」19.5%、27.3%、「不可能」37.7%、40.5%、「ない」27.6%、34.3%である。

これら2つのRQはともに、何かしらの結論が導出されうる可能性を持ち、問いそれ自体が結論の大部分を言い表している点で類似する。いろいろの映画作品が人びとに「何かしらを与える」ことは論をまたないし、高等学校の生徒ならば「美しさ（のみならず優劣、よしあしなど多くの価値基準）が文化によって異なる」との言明は“正解”であることを知っている（それが真実か、どのように異なるのかを何一つ知らないとしてもである）。見方を換えればそれらの点でいずれのRQも、すぐれた意義や価値を持っているとはいいがたい。そのようでありながら両者の回答傾向が異なるのはなぜか。

前者「⑩」は問いを構成する「ジブリ映画」「人」「与える」すべての概念があいまいですぐさま調査・研究には取りかかれぬ。ゆえにそれを不明確、不可能などと判ずることにさほどの無理はない。ただ、一連の学修を始めた調査1の時点とさまざまな過程を経た調査2の時点とで回答の割合にさほどの変化が見られないのも事実である。前稿「高校生のリサーチクエスチョンに関する評価基準」のなかでも指摘したとおり、生徒たちのなかに

はすでにこのような概念定義のあいまいなRQを排する能力を持った者がおり、しかし一年間の学修はそのほかの生徒たちが同様の能力をしっかりと成長させるまでには至っていないと見るのが妥当であろう。後者「⑫」にたいして消極的な評価を与える割合が調査1の時点で低く、さらに調査2の時点でもさほど伸張していないことはその証左でもある。

これらの回答傾向からは、また、彼女たちの興味・関心が評価の全体に影響している可能性を読み取ることができる。数値から明らかなおおむね彼女たちは「ジブリ映画」にさほどの関心はなく、たいして「“美しさ”」の構成には（ジブリ映画に比べれば）いくらかの関心がある。本来的にRQの評価は自分たちの好みに左右されるべきではないが、すでに『学習指導要領』までもが自己との関わりを強調するのであるから、学修の過程から主観的な要素を遠ざけることはきわめて難しい。授業の構成や進行においては、努めて日ごろの生活感覚や心持ちと距離を置き、探求の質

や価値をみきわめるよう助言を重ねていかなければならないが、それが生徒たちの主体性を損なう可能性もじゅうぶんにある。

### (3) 概念定義があいまいなRQにたいする評価

くり返し指摘したとおり、例示されたRQのなかには概念の意味するところが大きく広いものが含まれる。前項までにみた「② SNSは私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか」の「SNS」「生活」「影響」、⑩「ジブリ映画が人に与えるものは」の「ジブリ映画」「人」「与えるもの」はその意味するところの限定が難しい。したがってそれらはRQとしてはいずれも適切さを欠くはずなのだが、じっさいには「⑩」については評価が低かったものの、「②」についてはむしろ評価が高い（表3-3）。「おおむね明確」と「とても明確」を足し合わせて「明確」、「おおむね実現可能」と「実現可能」を足し合わせて「可能」、興味・関心が「とてもある」と「少

表3-2 ⑫ “美しい人” / ⑩ジブリ映画の比較

⑫ 調査1	まったく不明確	3.1	可能性がない	4.5	まったくない	4.9
	やや不明確	16.4	可能性が低い	33.2	あまりない	22.7
	おおむね明確	44.1	おおむね可能	36.7	少しある	39.2
	とても明確	31.8	実現可能	21.3	とてもある	30.4
⑫ 調査2	まったく不明確	2.1	可能性がない	5.2	まったくない	9.1
	やや不明確	25.2	可能性が低い	35.3	あまりない	25.2
	おおむね明確	52.1	おおむね可能	43.7	少しある	45.1
	とても明確	19.6	実現可能	12.6	とてもある	18.9
⑩ 調査1	まったく不明確	9.4	可能性がない	7.3	まったくない	12.2
	やや不明確	37.4	可能性が低い	40.2	あまりない	30.8
	おおむね明確	34.3	おおむね可能	36.7	少しある	34.3
	とても明確	16.1	実現可能	13.3	とてもある	22.0
⑩ 調査2	まったく不明確	9.8	可能性がない	7.0	まったくない	10.8
	やや不明確	45.1	可能性が低い	46.5	あまりない	34.3
	おおむね明確	31.5	おおむね可能	36.4	少しある	33.9
	とても明確	12.2	実現可能	7.3	とてもある	18.5

しある」を足し合わせて「ある」として調査1と調査2の回答傾向を再掲すれば次のようになる。「②」は「明確」89.8%, 84.3%, 「可能」83.9%, 81.8%, 「ある」68.9%, 64.7%。「⑩」は「明確」50.4%, 43.7%, 「可能」50.0%, 43.7%, 「ある」56.3%, 52.4%である。

両者にたいする回答傾向がこのようである理由について、前項までに、SNSについては生徒たちが分かったつもりになること、ジブリ映画については興味・関心の低さを指摘してきた。それらをふまえつつ、両者を対照することによって言うその他の要因を探っていきたい。

先の通り、いずれのRQも問いを構成する概念があいまいだが、それはたがいに言葉を換えても成立するということでもある。かりに「SNSが人に与えるものは」「ジブリ映画は私たちの生活にどのような影響を及ぼすのか」としても、不自然な用語法ではあるが意味不明ではない。ここから進んで、明快さのためにやや誇張して言えば、回答した生

徒たちは「SNS」「ジブリ映画」にだけ目をやっていたのではないかとさえ思われる。ごく初歩的な“調べ学習”の対象としてそれらをとらえ、調査・研究のイメージを持たずに「評価」したのではないか。何かがあるに「影響する」とは、おおよその感覚的理解はしえても厳密な把握、測定には労を要する。生徒たちはこれまでにそのような経験もなく、せいぜいが「アンケート」でもすれば事足りると思っているくらいかもしれない。

一般的に言って、彼女たちがそのような経験をする機会は観察や実験を多く含む教科のなかにある。とはいえ、長い時間、地道にデータを積み重ねてようやく一つの知識を得たり、概念の定義を厳密にして対象にせまる訓練を受けることも、また難しい。『学習指導要領』が掲げる「課題に関わる概念を形成」するからには、いかにして養成しうるものなのか。

表3-3 ②SNS/⑩ジブリ映画の比較

② 調査1	まったく不明確	0	可能性がない	1.0	まったくない	5.2
	やや不明確	9.4	可能性が低い	14.3	あまりない	25.2
	おおむね明確	51.0	おおむね可能	54.5	少しある	47.9
	とても明確	38.8	実現可能	29.4	とてもある	21.0
② 調査2	まったく不明確	1.4	可能性がない	2.8	まったくない	5.2
	やや不明確	12.9	可能性が低い	14.7	あまりない	28.7
	おおむね明確	49.0	おおむね可能	54.5	少しある	45.1
	とても明確	35.3	実現可能	27.3	とてもある	19.6
⑩ 調査1	まったく不明確	9.4	可能性がない	7.3	まったくない	12.2
	やや不明確	37.4	可能性が低い	40.2	あまりない	30.8
	おおむね明確	34.3	おおむね可能	36.7	少しある	34.3
	とても明確	16.1	実現可能	13.3	とてもある	22.0
⑩ 調査2	まったく不明確	9.8	可能性がない	7.0	まったくない	10.8
	やや不明確	45.1	可能性が低い	46.5	あまりない	34.3
	おおむね明確	31.5	おおむね可能	36.4	少しある	33.9
	とても明確	12.2	実現可能	7.3	とてもある	18.5

(4) 自然科学的な実験の実施を前提とする RQ にたいする評価

例示された RQ のうち、じっさいに生徒たちが調査・研究するばあいには彼女たちみずからによる実験を不可欠とするであろうものが「⑬ ウォータープルーフのマスカラは水の温度に左右されるか、また水以外の液体だとどのようになるのか」「⑭ エアリズムとヒートテックは実際にはどのような特徴があるのか」である。いずれの RQ もこれまでのものと同様、2017 年度当時の高校 2 年生たちが提出したものである。彼女たちのいくらかはマスカラを使っており、それらのなかにはウォータープルーフつまり耐水性を持って汗や皮脂、雨などによる「くずれ」の小さい製品も含まれる。そこでその耐水性はどのようであるかという問いを設定した。たほうエアリズムはある衣料品メーカーが販売する吸湿、放湿機能をうたった下着製品（インナー）であり、ヒートテックは同じメーカーによる暖かさの機能をうたった製品である。広告媒体や店舗

での説明を通じてそれらを知ったり、購入して着用する生徒たちもいるであろう。

「おおむね明確」と「とても明確」を足し合わせて「明確」、 「おおむね実現可能」と「実現可能」を足し合わせて「可能」、興味・関心が「とてもある」と「少しある」を足し合わせて「ある」とする。調査 1、調査 2 の数値は「⑬」では「明確」76.6%、80.8%、「可能」85.3%、82.2%、「ある」56.0%、52.1%。「⑭」では「明確」69.3%、71.4%、「可能」76.6%、77.0%、「ある」37.4%、38.1%となっている（表 3-4）。両者の回答傾向は興味・関心で大きく異なり、分かりやすさや実現可能性でも 10 ポイントでいど異なる。ここでも生徒たちの興味・関心の影響を推察することができる。マスカラは彼女たちにとってふだんからなじみがあり、機能性下着はそれが薄いのではないか。残念ながらそのような側面は否定しがたい。

ただ、それ以上にいまは、生徒たちがいずれの RQ にたいしても分かりやすく、実現可

表 3-4 ⑬マスカラ／⑭ヒートテックの比較

⑬ 調査1	まったく不明確	3.5	可能性がない	2.1	まったくない	15.0
	やや不明確	12.9	可能性が低い	4.9	あまりない	24.8
	おおむね明確	30.1	おおむね可能	33.9	少しある	32.2
	とても明確	46.5	実現可能	51.4	とてもある	23.8
⑬ 調査2	まったく不明確	2.4	可能性がない	1.7	まったくない	11.5
	やや不明確	10.1	可能性が低い	8.7	あまりない	29.7
	おおむね明確	39.9	おおむね可能	37.1	少しある	32.5
	とても明確	40.9	実現可能	45.1	とてもある	19.6
⑭ 調査1	まったく不明確	2.8	可能性がない	1.4	まったくない	16.1
	やや不明確	17.5	可能性が低い	12.6	あまりない	38.5
	おおむね明確	41.3	おおむね可能	41.6	少しある	28.7
	とても明確	28.0	実現可能	35.0	とてもある	8.7
⑭ 調査2	まったく不明確	3.1	可能性がない	3.1	まったくない	14.7
	やや不明確	19.9	可能性が低い	13.3	あまりない	40.9
	おおむね明確	46.9	おおむね可能	47.6	少しある	29.0
	とても明確	24.5	実現可能	29.4	とてもある	9.1

能であるとの評価を多く与えたことに注目したい。マスカラは製品の耐水性を水の温度との関係でみるもので、問いのなかにあいまいな概念は含まれない（水以外の液体が不明であるとはいえるが、用途からしておのずと限定されうる）。エアリズムもヒートテックも発汗や寒さとの関係を調べることは了解され相対的に高い評価につながっている。ただしその研究方法については即座に想像されず、そこからマスカラとの差異が生じたのであろう。前段とは真逆のコメントになってしまうが、自分たちの興味・関心に左右されたとはいえあるていどの客観的な視座を維持しながら問いの分かりやすさ、調査・研究の実現可能性を評価しえたことには注目しておきたい。

**(5) 明確さ、実現可能性、興味・関心の違いが異なるRQ**

先に見た「⑩ ジブリ映画が人に与えるものは」のように明確さ、実現可能性、興味・関心がともに低いRQのほか、実現可能性は

高いが興味・関心がうすい、実現可能性は低い興味・関心はある、といったRQもある。そのような観点から「⑦ 北海道と沖縄の和食の違いがなぜ生まれるのか」「⑧ きょうだいがいる子といない子の性格の違い」を比較しながら見ていきたい（表3-5）。これまでどおり「おおむね明確」と「とても明確」を足し合わせて「明確」、 「おおむね実現可能」と「実現可能」を足し合わせて「可能」、興味・関心が「とてもある」と「少しある」を足し合わせて「ある」として、調査1、調査2の順で見れば「⑦」は「明確」76.6%、79.1%、「可能」76.2%、81.1%、「ある」39.1%、38.1%。「⑧」は「明確」72.8%、66.8%、「可能」54.9%、48.3%、「ある」66.4%、62.9%。前者「和食」にたいする評価は他の項目と比べても低くないが、興味・関心は明らかに低い数値である。それと比べて分かりやすさで下回り、実現可能性も低い評価を与えられながら、興味・関心については「きょうだい」の方がつよい。この回答傾向の背景にあるものは何か。

表3-5 ⑦和食の違い／⑧きょうだいの比較

⑦ 調査1	まったく不明確	2.8	可能性がない	1.4	まったくない	20.3
	やや不明確	16.8	可能性が低い	17.1	あまりない	37.4
	おおむね明確	43.4	おおむね可能	42.3	少しある	28.3
	とても明確	33.2	実現可能	33.9	とてもある	10.8
⑦ 調査2	まったく不明確	3.1	可能性がない	1.0	まったくない	18.2
	やや不明確	14.7	可能性が低い	14.0	あまりない	40.9
	おおむね明確	49.0	おおむね可能	52.4	少しある	28.3
	とても明確	30.1	実現可能	28.7	とてもある	9.8
⑧ 調査1	まったく不明確	2.4	可能性がない	5.9	まったくない	8.0
	やや不明確	21.3	可能性が低い	36.4	あまりない	23.8
	おおむね明確	41.3	おおむね可能	34.3	少しある	38.1
	とても明確	31.5	実現可能	20.6	とてもある	28.3
⑧ 調査2	まったく不明確	5.6	可能性がない	8.4	まったくない	9.1
	やや不明確	26.6	可能性が低い	41.6	あまりない	25.5
	おおむね明確	47.6	おおむね可能	35.0	少しある	36.7
	とても明確	19.2	実現可能	13.3	とてもある	26.2

和食、きょうだいという高校生たちにも身近でよく知られたことがらは、しかし、これまでに見たRQとは異なる性格や事情を持っているように考えられる。前者、和食について言えば、ふだんからさまざまな情報を得て地域ごとの違いがあることも承知しており、あるていどの適切さを持ってその問いの分かりやすさや調査・研究の実現可能性を判断しているはずである。そのように高く評価しうる問いであっても、取り組もうとは思わない。彼女たちにとってそれはウェディングドレスの白さには勝らないのである。

対照的に、後者、きょうだいの有無による性格の違いについては、調査・研究の実現可能性はSNSのそれを下回りながら、興味・関心はSNSと同じていどのつよさをもつ。ここで示された評価や判断は、論理的思考からよりもむしろ日ごろの生活実感から出たものではないか。きょうだいの有無に由来した何かを的確に言い当てるのは難しい、けれど自分たちはそれにおおいに振り回されてもいる、その切実さの関数として、彼女たちの回答があるのではないか。

### おわりに

前稿と本稿をあわせて述べる。前稿末尾にあるとおり、生徒たちはDignityの授業いぜんからあるていど、リサーチクエストを評価する能力を持っており、授業を通じて一方ではさらに判断の精度を上げ、しかし他方ではじゅうぶんな能力の伸長が見られない分野もあった。とくに事実と当為の区別について不足が目立ち、それらはみずからリサーチクエストを作成する段階になって顕著となる。本稿では彼女らの評価、判断が興味・関心につよく左右されているありさま、概念定義にたいする姿勢の未形成や脆弱さ、判断に生活実感や日常知の占める大きさなどを確

認した。

私たちはくり返し、生徒たちがより“よい”リサーチクエストを作成するようにうながし、努める。けれど彼女たちにとっての問いの“よさ”は、多くのばあい彼女たちが対象に感じる身近さ、親しさ、切実さなどにふかくかわり、指導する側のねらいとはいきがちがう。とくに生徒たちの「実生活と自己との関わり」や「主体性」を重視し、「体験活動」を積極的に取り入れるばあいには、それが望ましい気づきや発見、課題の設定を妨げる可能性について慎重に見極めなければならない。

### 参照・引用文献

- 内山 潤・岩崎 公弥子・時岡 新・柳瀬 公代・福田 順(2018)「高校生のリサーチクエストに関する評価基準」『金城学院大学論集 人文科学編』第16巻第1号
- 後藤 芳文・伊藤 史織・登本 洋子(2014)『学びの技』玉川大学出版会
- 酒井聡樹(2006)『これから論文を書く若者のために』共立出版
- 酒井聡樹(2013)『これから研究を始める高校生と指導教員のために』共立出版
- 宅間紘一(2008)『はじめての論文作成術(三訂版)』日中出版
- 福原俊一(2015)『リサーチクエストの作り方』特定非営利活動法人健康医療評価研究機構
- 文部科学省(2013)『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』文部科学省
- 文部科学省(2018)『平成29・30年改訂 高等学校学習指導要領』文部科学省

### 付記

本研究は金城学院大学の父母会特別研究助成「中学から大学までの汎用的能力を育成する教育手法の開発」(代表 岩崎公弥子)の一部として行われたものである。